様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４４２５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０３５７

研究課題名（和文）ケベックを中心とする仏語圏文学のトランスミグランスー移民作家受容の比較研究

研究課題名（英文）"Transmigrance" in the literature of French language around Quebec---comparative studies about the acceptance of immigrant authors

研究代表者
真田　桂子（SANADA, Keiko）

阪南大学・流通学部・教授

研究者番号：６０２７８７５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではケベックを中心とする仏語圏文学における移民作家受容とトランスミグランスと呼ばれる移民文学の浸透についての比較研究を行った。その結果、ケベックでは「移動文学」l'ecriture migrante の興隆に見られるように移民作家の受容は先進的な状況にあるが、フランスでは植民地主義の影響と複雑な「移民問題」を背景に移民作家の受容はいまだ発展途上の段階にあった。しかし2012年のフランス初の「移動文学作家事典」の刊行に見られるように、l'ecriture migranteはまさにグローバル化を象徴する文学として欧州にも波及し、社会や文学全般に浸透し影響を及ぼしていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study concerns a comparative analysis of the acceptance of immigrant authors and their penetration into the literatures of the French language. This is known as "Transmigrance". In Quebec, Canada, acceptance of immigrant writers has advanced, symbolized by the prosperity of migrant literature, known as "l'ecriture migrante". However, in France, because of the lasting effects of colonialism, or in the background of complex immigrant problems, the acceptance of immigrant writers is still developing. Nonetheless, the recent publication of the first dictionary about migrant writers in France in 2012 shows some progress in this area. It turns out that "l'ecriture migrant" is spreading in Europe and making its way into society. This success, influenced in the literature, can be seen as a part of the concept of globalization.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ケベック文学　仏語圏文学　移民作家　トランスミグランス　移動文学　統合政策　アラブ系二世文学　移民問題

１．研究開始当初の背景

本研究課題の発案のきっかけは、平成 17 年度から平成 19 年度にかけて給付された科学研究費補助金（基盤研究 C）による研究課題「現代ケベック文学が映すマイノリティ性を核としたトランスカルチュラリズムの伸展」（課題番号：17520213）において明らかになった研究成果に基づいている。申請者は『トランスカルチュラリズムと移動文学―多元社会ケベックの移民と文学』（彩流社、2006 年）でその研究成果の一部を発表しているが、仏語圏ケベックでは、今日民族共存の理念として広く注目され、カナダや豪で国是ともなっている多文化主義（マルチカルチュラリズム）とは異なった独自の共存のあり方が模索されていた。すなわちケベックにおいて、とりわけ州の人口の約半数が集中するモントリオールでは、もともと仏語と英語の二言語がせめぎ合い、そこに仏語も英語も母語としないアロフォンと呼ばれる移民が入ってくることによって、「文化の三角構造」と呼ばれる特異な状況が生じている。トランスカルチュラリズムはモントリオールのこうした特殊な状況を背景に、マイノリティの側から発祥し、アイデンティティの変容そのものを問題にする、新しい文化共存と変容のモデルであった。

この横断文化的（トランスカルチュラル）な状況を映しとり、その伸展に寄与したのは、おもに 1980 年代から仏語によって活発な創作活動を行うようになった移民作家たちであった。彼らの文学は、脱領土的な想像力の地平を切り拓く「移民文学」ならぬ「**移動文学**」**l'écriture migrante** と呼ばれて一つの潮流をなし、ポストモダニスムが爛熟したケベック社会の文化的雑種性の象徴として注目を浴びた。特に注目すべきことは、ケベックの移民作家についての辞典を編纂したダニエル・シャルティエがその序文においても指摘しているように、ケベックでは移民作家は明示されたうえで承認され、「移動文学」はケベック文学のなかで周縁的な位置にとどまるのではなく、一つのジャンルとして無視できない影響力を持つに至ったことである。こうした動向は、他国においては、例えばフランスでは、移民作家の文学は普遍性の名のもとにフランス文学全体の中に吸収されてしまっているし、ベルギーでは周縁的な位置に追いやられており、どちらかと言えば移民であるという立場は隠蔽されるか無視される傾向にあるのとは対照的である。(Daniel Chartier, *Dictionnaire des écrivains émigrés au Québec 1800-1999*, Editions Nota bene, 2003) さらに注目されることは、ケベックでは「移動文学」とそれを担う移民作家たちは高校の教科書にも取り上げられ、教育を通して広く浸透しケベックの若い世代にも大きな影響を及ぼしていることである。ケベックでは二十一世紀に入り、移民作家とその文学に影響を受け、「移住性」や「移民との交感」をテーマとした新しいアイデンティティと感性を備えた新世代文学も続々と誕生し、こうした状況はトランスカルチュラリズムが浸透した結果生まれた新しい動向と考えられ、例えばケベックの批評家であるジル・デュプイは、この動向を**トランスミグランス**と呼んでいる。(Gilles Dupuis, "Les écritures tansmigrantes. Les exemples d'Abla Farhoud et de Guy Parent", D.Chartier et d'autres, *Littérature, Immigration et Imaginaire au Québec et en Amérique du Nord, L'Harmattan*, 2006) さらに、ケベックでの移動文学の動向はすでに海外でも注目されており、先行研究としてモニック・ルブランとリュック・コレらのグループにより、ケベック、フランス、ベルギー、スイスの仏語圏諸国において、おもに教育現場での教材を対象に、移民文学の特徴とそれらの受容についての比較研究を行われていた。(Monique LEBRUN et Luc COLLES, *La littérature migrante dans l'espace francophone, Belgique – France – Québec -Suisse* , Didactique, E.M.E, 2007) こうしたケベックでの移動文学の浸透と影響力に触発され、仏語圏全般での移民文学の動向に関心をもつに至った。

２．研究の目的

従って本研究課題では、近年のケベックの「インターカルチュラリズム」やフランスの「ライシテ」概念に代表される、移民政策、統合政策などの社会的背景や文化的価値観をめぐる議論を踏まえ、移民文学とその受容についての**比較研究**を行うことを目的にした。とりわけケベックでのトランスミグランスという動向に注目し、ケベックとフランスの比較を中心に、仏語圏諸国で、移民作家とその文学がどのような問題意識を反映し、どのようなテーマを描いているか、またそれらはそれぞれの社会において、どのように受容され位置づけられているかを、比較研究の視点から分析することをめざした。テーマの分析、作品の評価や反響、移民作家や作品の教育における浸透などの側面から調査と分析、考察を行う。特に移民との共生のあり方において、ケベックでの「**顕在化―対話型**」モデルとフランスでの「**普遍化―抑圧型**」モデルに注目し、その状況がどう反映されているかについて分析を行う。また、「**植民地国家**」（フランス）と「**植民地を持たなかった地域**」（ケベック）での、移民作家をめぐる状況の違いについても注目した。

３．研究の方法

①資料・文献の収集　②専門家、あるいは作家、関係者とのインタヴュー、③テキスト分析を含めた資料・データの分析と考察、などを通して遂行した。従って、本研究において

は、随時、ケベック、フランスなどの現地に赴き、文献の収集と研究者や作家とのインタビュー、意見交換に努め、情報収集を行った。

４．研究成果

（１）平成 21 年度から 22 年度にかけては、約 10 カ月の産休と育休をはさみ、ケベック文学におけるトランスミグランスの進捗状況を検証した。とりわけ移民作家受容の重要な背景となる共存の理論や統合政策について注目した。近年、移民の受け入れや統合においてその先駆性や独自性が注目を浴びているケベックの状況を明らかにするため、「フランス語憲章」施行後 30 年後、「雑種的」仏語化政策が定着しトランスミグランスの土壌となる若い世代が育っていることを分析し、日本フランス語教育学会(SJDF)主催の国際学会で発表を行った(研究業績、学会発表 1 参照)。さらにケベックにおいて移民との共生の指標作りともなった「**文化的寛容性**」**Les accommodements raisonables** の議論とケベックの共存の理論として台頭してきた「**インターカルチュラリズム**」に注目し 、専門家を招いて研究会を開催し、自らもパネラーとして「岐路に立つケベックと新しい統合の模索」というテーマで研究発表を行った(研究業績、学会発表 2 参照)。また 2008 年の世界フランス語教授連盟(FIPF)世界大会での発表をもとに執筆した、ケベック文学におけるトランスミグランスの一例としてのアジア系移民作家についての研究論文が FIPF の国際学会論集に掲載された(研究業績、雑誌論文 1 参照)。

（２）平成 23 年度はフランスの移民文学の現状とその受容について調べるため、フランス・パリへ出張し文献の収集とインタビューを行った。フランスでは 1950 年代から旧植民地であるマグレブ諸国から大量のアラブ系移民が流入し移民問題に揺れている。こうした背景のもとで、フランスの移民文学では、とりわけ **Beur** と呼ばれる**アラブ系二世の文学**が社会的問題とアイデンティティの不安定感を反映し存在感を放っている。パリでは主にこのアラブ系二世作家の動向について最新の資料を収集し研究調査を行った。Beur 作家の作品のテーマやその受容など、全般的な傾向についての分析を行うとともに、なかでも 1980 年代から多数の小説を発表しているアルジェリア系移民二世のアズズ・ベガッグ(Azouz Begag) の作品に注目し詳細な分析を行った。ベガッグの小説には、「二重の隔たり」を生きざるを得ないアラブ系二世がおかれた固有の状況についての問題提起や、アラブ系移民の共同体の姿を、フランス社会において開かれる一つの異次元として積極的に描き出そうとする戦略的な意図が込められていた。またこの作品の教育上やメディアでの受容について調査し、フランス社会での移民問題を背景に賞賛と反発を巻き起こしていることを浮き彫りにした。以上のようにケベックと比較して、フランスでの移民文学を取り巻く状況やその受容は複雑でありアンビバレンツな状況にあることが明らかになった。この研究成果は、論文「フランスのアラブ系二世文学に見るアイデンティティの〈隔たり〉と克服―アズズ・ベガッグの自伝的小説にそいながら」としてまとめて発表した(研究業績、雑誌論文 2 参照)。

（３）平成 24 年度は昨年度に引き続き、ケベックとフランスの移民文学についての比較研究を推し進めた。昨年度の研究成果をさらに発展させ、日本フランス語教育学会の 2012 年度春季大会にて研究発表「フランスのアラブ系二世文学とその受容―Azouz Begag の事例を中心に」(研究業績、学会発表 3 参照)を行った。その報告において、ケベックでの言語を基軸とする多様な出自の移民の動向とは異なり、フランスでは旧植民地からのアラブ系移民が大多数を占めている。その中で台頭したアラブ系二世(Beur)文学は、フランスの文学的規範と価値観に照らして長らく困難な状況に置かれていたが、近年徐々に注目を浴びつつあることを明らかにした。

一方 画期的なこととして、2012(H24) 年に、ケベックで発祥した「移動文学」l'écriture migrante の概念に則った『**フランス移動文学作家事典 1981－2011**』がフランスで出版された。これはフランスで初めて移民作家だけを網羅的に取り上げた事典であり、ケベックの「移動文学」概念が欧州にも波及していることが明らかになった。従って平成 24 年度の補助金を一部繰り越し、平成 25 年度にフランスへ出張し、事典の編纂に加わったマグレブ文学研究の大家である CH.Bonn 教授らにインタビューを行うなど、この事典の刊行をめぐる最新の動向について調査を行った。その研究成果は、2013 年 10 月の日本ケベック学会全国大会でワークショップを企画して報告(研究業績、学会発表 5 参照)し、論文「ケベックにおける〈移動文学〉の浸透と波及―『フランス移動文学作家事典 1981－2011』の刊行をめぐって」(研究業績、雑誌論文 4 参照)として発表した。また 2014 年 2 月には、大阪市立大学都市文化研究センターにて、頭脳循環プログラムの一環である研究会（EU 域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築）において、ドイツの移民文学の専門家とともに講演者として招かれ、ドイツ語圏、フランス語圏を含めた欧州での移民文学の動向について比較検証、考察を行う機会に恵まれた(研究業績、学会発表 6 参照)。これまでの研究の結果、ケベックで発祥した「移動文学」の概念はグロバール化を象徴する概念として広く波及し、トランスミグランスが世界的に浸透していることが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

1. Keiko SANADA « Littérature et révolte chez les écrivains asiatiques d'expression française, Ying Chen et Aki Shimazaki » *Faire vivre les identités francophones, Les Actes du XII Congrès mondial de la FIPF de Québec 2008, Dialogues et Cultures,* No.55 Tome 3, <*Enjeux pédagogiques et didactiques*> , Paris, France, (FIPF=Fédération international des Professeurs deFrançais), 2009.12, pp.889-895. 査読有、国際フランス語教授連盟 2008 年度世界大会論文集

2 真田桂子「フランスのアラブ系二世文学に見るアイデンティティの「隔たり」と克服―アズズ・ベガッグの自伝的小説にそいながら―」『阪南論集・人文自然科学編』47 巻 2 号(阪南大学学会)、2012 年 3 月、pp.17-25.

3.真田桂子「ジャック・ブローにおける内的流浪と記憶」『カナダ文学研究』第 20 号（日本カナダ文学会） 査読有、2012 年 12 月、pp.39-48.

4.真田桂子「ケベックにおける『移動文学』の浸透と波及―『フランス移動文学作家事典 1981－2012』の刊行をめぐって」『阪南論集・人文自然科学編』第 49 巻 2 号、(阪南大学学会),2014 年 3 月、pp.81-93.

〔学会発表〕（計６件）

1.Keiko SANADA « La francisation « hybride », la triangulation linguistique au Québec et les enjeux du plurilinguisme », Table Ronde : *Enjeux du plurilinguisme dans le monde francophone*, Colloque International, *Plurilinguisme et pluriculturalisme : l'enseignement du français en Asie de l'Est et dans le monde* /Université de Kyoto, SJDF=Société Japonaise de didactique du Française、日本フランス語教育学会、京都大学その他共催、「複数言語主義、複数文化主義に関する国際学会」シンポジウムにおけるパネラー(招待講演)、2009 年 11 月 6 日

2.真田桂子(招待講演)「岐路に立つケベックと新しい統合の模索―文化的寛容性をめぐる議論の反響と受容の比較検証にそいながら」日本カナダ学会関西支部会・関西ケベック研究会合同研究会、於 大阪学院大学、2011 年 2 月

3.真田桂子「フランスのアラブ系二世文学とその受容－Azouz Begag の事例を中心に」日本フランス語教育学会 2012 年度春季大会、於 慶応義塾大学、2012 年 6 月 2 日

4.真田桂子(招待講演) 「ジャック・ブローにおける内的流浪と記憶」日本カナダ文学会 30 周年記念シンポジウム 1『移動と記憶：展望フランス語圏カナダ文学』におけるパネラー、於 明治大学、2012 年 7 月 29 日

5.真田桂子(学会ワークショップ・コーディネーター兼報告者)、論題「『国民文学』から『移動文学』へ：ケベック文学の多元化とその波及」、日本ベルギー研究会との共催ワークショップ『ケベックとベルギー：フランス語圏の多元社会―言語、政治、文学』、日本ケベック学会全国大会、於 関西学院大学、2013 年 10 月 12 日

6.真田桂子（招待講演）論題「〈移動文学〉の浸透とフランス語圏の変容―移民作家受容の比較的見地から」、第 4 回合同生活圏研究会『移動とアイデンティティ：「移民文学」とトランスローカルな経験の諸相』、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、頭脳循環プログラム「EU 域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築」主催、2014 年 2 月 22 日

６．研究組織

(1)研究代表者

真田桂子（SANADA, Keiko）

阪南大学 流通学部 教授

研究者番号：６０２７８７５２